



谷崎潤一郎文庫

鍵 殘虐記
瘋癲老人日記
他一篇

六興出版



谷崎潤一郎文庫

八八〇円

第九卷 鍵・瘋癲老人日記

昭和四十八年 三月二十五日 発行

著者 谷崎潤一郎

発行者 吉川 文子

印刷 大日本法令印刷

製本 手塚製本

発行所 六興出版

東京都文京区水道二一九―二

郵便番号 一一二

電話 〇三(九四三)三四三一

振替 東京九二四四八

© 1973 MATSUKO TANIZAKI, Printed in Japan.

落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0393-02409-9216

目次

猫と庄造と二人のおんな

三

残虐記

七九

鍵

一四三

瘋癲老人日記

二四五

注解

三六一

解説

三七三

監

修

野谷
村崎
尚松
吾子

猫と庄造と二人のおんな

福子さんどうぞゆるして下さいこの手紙雪ちゃんの名借り
 ましたけどほんとうは雪ちゃんではありません、そう云う
 たら無論貴女は私が誰だかお分りになったでしょうね、い
 えいえ貴女はこの手紙の封切って開けたしゅん間「さては
 あの女か」ともうちゃんと気がおつきになるでしょう、そ
 してきつと腹立てて、まあ失礼な、……友達の名前無断
 で使って、私に手紙よこすとは何という厚かましい人と、
 お思ひになるでしょう、でも福子さん察して下さいな、も
 しも私が封筒の裏へ自分の本名書いたらきつとあの人が見
 つけて、途中で横取りしてしまうことよう分ってるのです
 もの、ぜひともあなたに読んでいただく思うたらこうす
 るより外ないのですもの、けれど安心して下さいませ、
 私決して貴女に恨み云うたり泣き言聞かしたりするつもり
 ではないのです。そりゃ、本気で云うたらこの手紙の十倍
 も二十倍もの長い手紙書いたかて足りないくらいに思いま
 すけど、今更そんなこと云うても何にもなりましせんも
 のねえ。オホホホホホ、私も苦勞しましたお蔭で大変強
 くなりましたよ、そういつもいつも泣いてばかりいませ
 んのよ、泣きたいことや口惜しいことたとんとありま
 すけど、もうもう考えないことにして、できるだけ朗らか

に暮らす決心しましたの。ほんとうに、人間の運命いうもの
 のいつ誰がどうなるか神様より外知る者はありませんの
 に、他人の幸福を羨んだり憎んだりするなんて馬鹿げてま
 すわねえ。

私かなんば無教育な女でも直接貴女に手紙上げたら失礼な
 ことぐらい心得てますのよ、それからこのことは塚本さん
 からたびたび云うてもらいましたけど、あの人どうしても
 聞き入れてくれませんので、今は貴女にお願いするより手
 段ないようになりましたの。でもこう云うたら何やたいそ
 うむずかしいお願いするように聞えますけど、決して決し
 てそんな面倒なことではありません。私あなたの家庭から
 ただ一つだけいただきたいものがあるのです。と云うたか
 らとて、勿論貴女のある人を返せと云うのではありませ
 ん。実はもっともつと下らないもの、つまらないもの、……
 リリーちゃんがほしいのです。塚本さんの話では、
 あの人にはリリーなんぞくれてやってもよいのだけれど、福
 子さんが離すのいやや云うてなさると云うのです、ねえ福
 子さん、それ本当でしょうか？ たった一つの私の望み、
 貴女が邪魔してらっしゃるのでしょうか。福子さんどうぞ
 考えて下さい私は自分の命よりも大切な人を、……いい

え、そればかりか、あの人と作っていた楽しい家庭のすべてのものを、残らず貴女にお譲りしたのです。茶碗のかけ一つも持ち出したものはなく、興入れの時に持って行った自分の荷物さえ満足に返してはもらいません。でも、悲しい思い出の種になるようなものない方がよいかも知れませんけれど、せめてリリーちゃん譲って下すつてもよくはありません？ 私には何も無理なこと申しません。踏まれ蹴られ叩かれてもじつと辛抱して来たのです。その大きな犠牲に對して、たった一匹の猫をいただきますと云うたら厚かましいお願いでしょうか。貴女に取ってはほんにどうでもよいような小さい獣ですけれど、私にしたらどんなに孤独慰められるか、……私、弱虫と思われたくありませんが、リリーちゃんでもいてくれなんだら淋しくてしようがありませんの、……猫より外に私を相手にしてくれる人間世の中に一人もいないのですもの。貴女は私をこんなにも打ち負かしておいて、この上苦しめようとなさるのでしょうか。今の私の淋しさや心細さに一点の同情も寄せて下さらないほど、無慈悲なお方なのでしょうか。

いよいよ貴女はそんなお方ではありません、私よく分っているのですが、リリーちゃんを離さないのは、あなたでな

くて、あの人ですわ、きつときつとそうすわ。あの人はリリーちゃんが大好きなのです。あの人も「お前と別れられても、この猫とやたらよう別れん」と云うたのです。そして御飯の時でも夜寝る時でも、リリーちゃんの方がずっと私より可愛がられていたのです。けど、そんなら何で正直に「自分が離したくないのだ」と云わんと、あなたのせいにするのでしょうか？ さあそのわけをよう考えて御覧なさりませ、……

あの人はいやな私を追い出して、好きな貴女と一緒にになりました。私と暮らしての間こそリリーちゃんが必要でしたけど、今になったらもうそんなもん邪魔になるはずではありませんか。それともあの人、今でもリリーちゃんがいなかったら不足を感じるのでしょうか。そしたら貴女も私と同じに、猫以下と見られてるのでしょうか。まあ御免なさい、つい心にもないこと云うてしもうて。……よもやそんな阿呆らしいことあるうとは思いませんけれど、でもあの人、自分の好きなこと隠して貴女のせいにするというのは、やっぱりいくら気が咎めている証拠では、……オホオホオホ、もうそんなこと、どっちにしたかて私には関係ないのでしたわねえ、けどほんとうに御用心なさいま

せ、たかが猫ぐらいと氣を許していらしたら、その猫に
さえ見かえられてしまうのですわ。私決して悪いことは申
しません、私のためより貴女のため思うて上げるのです、
あのリリーちゃんあの人の側から早う離してしまいなさ
い、あの人それを承知しないならいよいよ怪しいではあり
ませんか。……

福子はこの手紙の一字一句を胸に置いて、庄造とリリーの
することにそれとなく眼をつけているのだが、小鯨の二杯
酢を肴にしてチビリチビリ傾けている庄造は、一と口飲ん
では猪口を置くと、

「リリー」

と云って、鯨の一つを箸で高々と摘まみ上げる。リリーは
後脚で立ち上がって小判型のチャブ台の縁に前脚をかけ、
皿の上の肴をじっと睨まえている恰好は、バアのお客がカ
ウンターに倚りかかっているようでもあり、ノートルダム
の怪物のようでもあるのだが、いよいよ餌が摘まみ上げら
れると、急に鼻をヒクヒクさせ、大きな、惻巧そうな眼
を、まるで人間がびっくりした時のようにまん円く開い
て、下から見上げる。だが庄造はそうやすやすとは投げて

やらない。

「そうれ！」

と、鼻の先まで持って行ってから、逆に自分の口の中へ入
れる。そして魚に滲みている酢をスッパスッパ吸い取って
やり、堅そうな骨は噛み砕いてやってから、またもう一遍
摘まみ上げて、遠くしたり、近くしたり、高くしたり、低
くしたり、いろいろにして見せびらかす。それにつられて
リリーは前脚をチャブ台から離し、幽霊の手のように胸の
両側へ上げて、よちよち歩き出しながら迫いかける。する
と獲物をリリーの頭の真上へ持って行って静止させるの
で、今度はそれに狙いを定めて、一生懸命に跳び着こうと
し、跳び着く拍子に素早く前脚で目的物を攫もうとする
が、アワヤというところで失敗してはまた跳び上がる。こ
うしてようよう一匹の鯨をせしめるまでに五分や十分はか
かるのである。

この同じことを庄造は何度も繰り返しているのだった。一
匹やっては一杯飲んで、

「リリー」

と呼びながら次の一匹を摘まみ上げる。皿の上には約二寸
ほどの長さの小鯨が十二三匹は載っていたはずだが、おそ

らく自分が満足に食べたのは三匹か四匹に過ぎまい、あとはスッパスッパ二杯酢の汁をしやぶるだけで、身はみんなくれてやってしまふ。

「あ、あ、あ痛！ 痛いやないか、こら！」

やがて庄造は頓興な声を出した。リリーがいきなり肩の上へ跳び上がって、爪を立てたからなのである。

「こら！ 降り！ 降りんかいな！」

残暑もそろそろ衰えかけた九月の半ば過ぎだったけれど、太った人にはお定まりの、暑がりやで汗っ掻きの庄造は、この間の出水で泥だらけになった裏の縁鼻へチャブ台を持ち出して、半袖のシャツの上に毛糸の腹巻をし、麻の半股引を穿いた姿のまま胡坐をかいているのだが、その円々と膨らんだ、丘のような肩の肉の上へ跳び着いたリリーは、つるつる滑り落ちそうになるのを防ぐために、勢い爪を立てる。と、たった一枚のちぢみのシャツを透して、爪が肉に喰い込むので、

「あ痛！ 痛！」

と、悲鳴をあげながら、

「ええい、降りんかいな！」

と、肩を揺す振ったり一方へ傾けたりするけれども、そうするとなお落ちまいとして爪を立てるので、しまいにはシャツにポタポタ血がにじんで来る。でも庄造は、

「無茶しよる。」

とボヤキながらも決して腹は立てないのである。リリーはそれをすっかり呑み込んでいるらしく、頬べたへ顔を擦りつけてお世辞を使いながら、彼が魚を啣んだと見ると、自分の口を大胆に主人の口の端へ持つて行く。そして庄造が口をもぐもぐさせながら、舌で魚を押し出してやると、ヒョイとそいつへ咬み着くのだが、一度に喰いちぎって来ることもあれば、ちぎったついでに主人の口の周りを嬉しそうに舐め廻すこともあり、主人と猫とが両端を咬えて引っ張り合っていることもある。その間庄造は「ウッ」とか、「ベツ、ベツ」とか、「ま、待ちいな！」とか合の手を入れて、顔をしかめたり唾液を吐いたりするけれども、実はリリーと同じ程度に嬉しそうに見える。

「おい、どうしたんや？——」

だが、やつのことで一と休みした彼は、何気なく女房の方へ杯をさし出すと、途端に心配そうな上眼使いをした。どうしたわけか今しがたまで機嫌のよかった女房が、酌を

しようともしないので、両手を懷ふところに入れてしまつて、真正面からぐつと此方こつちを視み詰つめてゐる。

「そのお酒、もうないのんか?」

出した杯さかを引つ込めて、オツカナビツクリ眼めの中を覗のぞき込んだが、相手はたじろぐ様子もなく、

「ちよつと話があるねん。」

と、そう云つたきり、口惜くやしそうに黙りこくつた。

「なんや? え、どんな話?——」

「あんた、その猫品しな子こさんに譲やつたげなさい。」

「何でやねん?」

藪やぶから棒ぼうに、そんな乱暴な話があるものと、つづけざまに眼めをパチクリさせたが、女房の方も負けず劣せうらず陰悪な表情へいしやうをしているので、いよいよ分らなくなつてしまつた。

「何でまた急に、……」

「何でも譲やつたげなさい、明日あした塚本むらもとさん呼よんで、早はよ渡してしまいなさい。」

「いったい、それ、どういうこツちゃねん?」

「あんた、否いややのん?」

「ま、まあ待ち! わけも云わんとそう云うたかて無理やないか。何ぞお前、氣きに触さわつたことあるのんか。」

リリーに対する焼餅やきもち?——と、一応思いついてみたが、それも腑ふに落ちないというのは、もともと自分も猫が好きだつたはずなのである。まだ庄造が前の女房の品子と暮らしていた時分、品子がときどき猫のことで焼餅やきもちを焼く話を聞くと、福子は彼女かのじよの非常識ひやうしきを笑つて、嘲弄ちょうろうの種にしたものだった。そのくらいだから、勿論庄造の猫好きを承知の上で来たのであるし、それから此方こつち、庄造はど極端ではないにしても、自分も彼と一緒にゐるリリーを可愛めづがつていたのである。現にこうして、三度三度の食事には、夫婦さし向いのチャブ台の間へ必ずリリーが割り込むのを、今までとやかく云つたことは一度もなかった。それどころか、いつでも今日きょうのような風に、夕飯の時にはリリーとゆつくり戯あそべながら晩酌ばんしやくを楽しむのであるが、亭主と猫とが演出するサーカスの曲芸にも似た珍風景を、福子とても面白おもしろうに眺ながめているばかりか、時には自分も餌えさを投なげてやつたり跳とび着かせたりするくらいで、リリーの介在かいざいすることが、新婚の二人を一層仲よく結び着け、食卓の空氣を明朗化する効能はあつても、邪魔になつてはいないはずだつた。とすると一体、何が原因なのであらう。つい昨日きのうまで、いや、ついさっき、晩酌を五六杯重ねるまでは何のこ

ともなかったのに、いつの間にか形勢が変つたのは、何かほんの些細なことが癢に触つたのでもあらうか。それとも「品子に譲つてやれ」と云うのを見ると、急に彼女が可哀そうにでもなったのか知らん。

そういえば、品子が此処を出て行く時に、交換条件の一つとしてリリーを連れて行きたいという申し出があり、その後も塚本を仲に立てて、二三度その希望を伝えて来たことは事実である。だが庄造はそんな云い草は取り上げない方がよいと思つて、そのつど断つていたのであつた。塚本の口上では、連れ添う女房を追い出して余所の女を引きずり込むような不実な男に、何の未練もないと云いたいところだけれども、やっぱり今も庄造のことが忘れられない、恨んでやろう、憎んでやろうと努めながら、どうしてもそんな気になれない、ついては思い出の種になるような記念の品が欲しいのだが、それにはリリーちゃんを此方へ寄越してもらえまいか、一緒に暮らしていた時分には、あんまり可愛がられているのが忌ま忌ましくて、蔭でいじめたりしたけれども、今になっては、あの家の中にあつたものが皆なつかしく、わけてもリリーちゃんが一番なつかしい、せめて自分は、リリーちゃんを庄造の子供だと思つて精一

杯可愛がつてやりたい、そうしたら辛い悲しい気持ちがいくらか慰められるであらう。――

「なあ、石井君、猫一匹ぐらい何だんね、そない云われたら可哀そうやおまへんか。」

と、そう云うのだったが、

「あの女の云うこと、真に受けたらアキまへんで。」

と、いつも庄造はそう答えるに極まつていた。あの女はとにかく懸引が強くつて、底に底があるのだから、何を云うやら眉唾物である。第一剛情で、負けず嫌いのくせに、別れた男に未練があるの、リリーが可愛くなったのと、しおらしいことを云うのが怪しい。彼奴が何でリリーを可愛がるものか。きっと自分が連れて行つて、思うさまいじめて、腹癒せをする気なのだらう。そうでなかったら、庄造の好きなものを一つでも取り上げて、意地悪をしようというのだらう。――いや、そんな子供じみた復讐心より、もっともつと深い企みがあるのかも知れぬが、頭の単純な庄造には相手の腹が見透せないだけに、変に薄気味が悪くもあれば、反感も募るのだった。それでなくてもあの女は、随分勝手な条件を沢山持ち出しているではないか。しかしもともと此方に無理があるのだし、一日も早く出てもらいた

いと思つたればこそ、大概なことは聞いてやったのに、その上リリーまで連れて行かれてたまるものか。それで庄造は、いくら塚本が執拗く云つて来ても、彼一流の婉曲な口実でやんわり逃げていたのであったが、福子もそれに賛成なのは無論のことで、庄造以上に態度がハッキリしていたのである。

「わけを云いな！ 何のこっちゃ、僕さっぱり見当がつかん。」

そう云うと庄造は、銚子を自分で引き寄せて、手酌で飲んだ。それから股をびたツと叩いて、

「蚊遣線香あれへんのんか。」

と、ウロウロその辺りを見廻しながら、半分ひとりごとのように云つた。あたりが薄暗くなったので、つい鼻の先の板塀の裾から、蚊がワンワン云つて縁側の方へ群がって来る。少し食い過ぎたという恰好でチャブ台の下にうづくまっていたリリーは、自分のことが問題になり出した頃こそそと庭へ下りて、塀の下をくぐつて、何処かへ行つてしまったのが、まるで遠慮でもしたようでも可笑しかったが、鰯ふく御馳走になった後では、いつでも一遍すうと姿を消すのであった。

福子は黙つて台所へ立つて行つて、渦巻の線香を捜して来ると、それに火をつけてチャブ台の下へ入れてやった。そして、

「あんた、あの鰯、みんな猫に食べさせなはったやろ？ 自分が食べたのん二つか三つよりあれしまへんやろ？」と、今度は調子を和けて云い出した。

「そんなこと僕、覚えてエへん。」

「わてちゃんと数えててん。そのお皿の上に最初十三匹あつてんけど、リリーが十四食べてしもて、あんたが食べたのん三匹やないか。」

「それが悪かったのんかいな。」

「何で悪いいうこと、分つてなはんのんか。なあ、よう考えて御覧。わて猫みたいなんも相手にして焼餅焼くのと違いまっせ。けど、鰯の二杯酢わては嫌いや云うのんに、僕好きやよつてに拵えてほしい云いなはったやろ。そない云うといつて、自分ちよつとも食べんとおいといつてからに、猫にばっかり遣つてしもて、……」

彼女の云うのは、こうなのである。

阪神電車の沿線にある町々、西宮、蘆屋、魚崎、住吉あたりでは、地元の浜で獲れる鰯や鰯を、「鰯の取れ取れ」「鰯

の取れ取れ」と呼びながら大概毎日売りに来る。「取れ取れ」とは「取りたて」という義で、値段は一杯十銭から十五銭ぐらい、それで三四人の家族のお数になるところから、よく売れると見えて一日に何人も来ることもある。が、鰻も鰻も夏の間は長さ一寸ぐらいのもので、秋口になるほど追い追いが伸びるのであるが、小さいうちは塩焼にもフライにも都合が悪いので、素焼すやききにして二杯酢に漬け、荳蔻しょうかうを刻んだのをかけて、骨ごと食べるより仕方がない。ところが福子は、その二杯酢が嫌いだと云ってこの間から反対していた。彼女はもっと温かい脂あぶらっこいものが好きなので、こんな冷めたいモソモソしたものを食べさせられては悲しくなると、彼女らしい贅沢ぜいたくを云うと、庄造はまた、お前はお前で好きなものを拵しらえたらよい、僕は小鰻が食べたいから自分で料理すると云って、「取れ取れ」が通ると勝手に呼び込んで買うのである。福子は庄造と従兄弟どうし同士で、嫁に來た事情が事情だから、姑しゅうとめには気がねが要らなかつたし、來た明くる日からわがまま一杯に振る舞っていたけれど、まさか亭主が庖丁ほうちやうを持つものを見ているわけに行かないから、結局自分がその二杯酢を拵えて、いやいやながら一緒にたべることになってしまう。おまけにそれが、

もうこのところ五六日もつづいてるのであるが、二三日前にふと気が付いたことというのは、女房の不平を犯してまでも食膳しょくぜんに上せるほどのものを、庄造は自分で食べるのか、リリーにばかり与えている。それでだんだん考えて見たら、なるほどあの鰻は姿が小さくて、骨が柔らかで、身をむしってやる面倒がなくて、値段のわりに数がある、それに冷めた料理であるから、毎晩あんな風にして猫に食わせるには最も適しているわけで、つまり庄造が好きだというのは、猫が好きだということなのである。この家では、亭主が女房の好き嫌いを無視して、猫を中心に晩のお数をきめていたのだ。そして亭主のためと思つて辛抱していた女房は、その実猫のために料理を拵え、猫のお附き合いをさせられていたのだ。

「そんなことあれへん、僕、いつかて自分が食べよう思うて頼むねんけど、リリーの奴があないに執拗しやくごうう欲しがるさかいに、ついウカッとして、後あとから後から投げてまうねんが。」

「謹うやまついなさい、あんた始めからリリーに食べさそう思うて、好きでもないもん好きや云うてるねんやろ。あんた、わてより猫が大事やねんなあ。」

「ま、ようそんなこと。……」

仰山に、吐き出すようにそう云ったけれど、今の一言ですっかり萎れた形だった。

「そんなら、わての方が大事やのん？」

「きまつてるやないか！ 阿呆らしなうて来るわ、ほんまに！」

「口でばかりそない云わんと、証拠見せてエな、そやないと、あんたみたいなもん信用せエへん。」

「もう明日から鰯買うのん止めにしよう。な、そしたら文句ないねんやろ。」

「それより何より、リリー遣つてしまひなはれ。あの猫いんようになつたら一番ええねん。」

まさか本気で云うのではないだろうけれど、タカを括り過ぎて依怙地になられては厄介なので、是非なく庄造は膝頭を揃え、キチンと畏まつてすわり直すと、前屈みに、その膝の上へ両手をつきながら、

「そうかてお前、虐められること分つててあんな所へやれるかいな。そんな無慈悲なこと云うもんやないで。」

と、哀れっぽく持ちかけて、嘆願するような声を出した。

「なあ、頼むさかいに、そない云わんと、……」

「ほれ御覧、やっぱり猫の方が大事なんやないかいな。リリーどないぞしてくれへなんたら、わて去なしてもらいまっさ。」

「無茶云いな！」

「わて、畜生と一緒にされるのんいやですよつてにな。」

あんまりムキになつたせいか、急に涙が込み上げて来たのが、自分にも不意打ちだったらしく、福子は慌てて亭主の方へ背中を向けた。

雪子の名を使った品子のあの手紙が届いた朝、最初に彼女が感じたのは、こんないたずらをして私達の間へ水を插そうとするなんて、何といういやな人だろう、誰がその手に乗つてやるもんか、ということだった。品子の腹は、こういう風に書いてやつたら、結局福子はリリーのいることが心配になつて、此方へ寄越すかも知れない、そうなつたら、それ見たことか、人を笑つたお前さんも猫に焼餅を焼くじゃないか、やっぱお前さんだつてそう御亭主に大事にされてもいないのだねえと、手を叩いて嘲つてやろう、そこまで巧く行かないとしても、この手紙をキッカケに家庭に風波が起るとしたら、それだけでも面白いと、そう思

っているに違いないので、その鼻を明かしてやるのには、
いよいよ夫婦が仲よく暮らすようにして、こんな手紙など
てんで問題にならなかつたというところを見せてやり、二
人が同じようにリリーを可愛がって、とても手放す気がな
いことをもっとハッキリ知らしてやる、——もうそれに
越したことはないのであった。

だが、あいにくなことにこの手紙の来た時期が悪かった。
というのは、ちょうどこの二三日小鯨の二杯酢の一件が福
子の胸につかえていて、一遍亭主を取っちめてやろうと考
えていた矢先だったのである。一体、彼女は庄造が思っ
ているほど猫好きではないのだが、庄造の気持ちを迎えるた
めと、品子への面当てと、両方の必要から自然猫好きにな
ってしまい、自分もそう思えば人にも思わせていたのであ
って、それは彼女がまだこの家へ乗り込まない時分、蔭で
姑のおりんなどとグルになって専ら品子の追い出し策に
かかっている間のことだった。そんな次第で、此処へ来て
からもリリーを可愛がってやって、せいぜい猫好きで通し
ていたのだが、だんだん彼女は那一匹の小さい獣の存在
を、呪わしく思うようになった。何でもこの猫は西洋種だ
ということだったが、以前、此処へお客で遊びに来て膝の

上などへ乗せてやると、手触りの工合が柔らかで、毛なみ
といい、顔だちといい、姿といい、ちょっとこの辺には見
当らない綺麗な雌猫であつたから、その時はほんとうに愛
らしいと思ひ、こんなものを邪魔にすると品子さんとい
う人も変っている、やっぱり亭主に嫌われると、猫にまで
僻みを持つのか知らんと、面当てでなくそう感じたものだ
つたけれど、今度自分が後金へ直つてみると、自分は品子と
同じ扱いを受けるわけでもなく、大切にされていることは
分つていながら、どうも品子を笑えない気持ちになつて来
るのが不思議であつた。それというのは、庄造の猫好きが
普通の猫好きの類ではなくて、度を越えているせいなので
ある。実際、可愛がるのもいいけれども、一匹の魚を（しか
も女房の見てゐる前で！）口移しにして、引つ張り合つた
りするなどは、あまり遠慮がなさすぎる。それから晩の御
飯の時に割り込んで来られることも、正直のところは愉快
でなかつた。夜は姑が氣を利かして、自分だけ先に食事
を済まして二階へ上がつてくれるのだから、福子にしてみ
ればゆっくり水入らずを楽しみたいのに、そこへ猫奴が這
入つて来て亭主を横取りしてしまふ。いいあんばいに今夜
は姿が見えないと思うと、チャブ台の脚を開く音、皿小